

とくもりじんじやしゃでん  
徳守神社社殿



天文8年（1529）に焼失したが、慶長9年（1604）春、森忠政が築城に先立ち、津山の鎮守として徳守神社を再建、同年内に落成して遷宮され、新田村において70石の社領を寄附された。2代藩主森長継は寛永14年（1637）さらに10石を加増し、寛文4年（1664）に社殿を新築した。

現在の本殿・釣殿・拝殿がこれにあたる。

つるやまはまんぐうはいんでん つりでんおよ しんせんじよなら まっしゃやくそ じんじやしゃでん  
鶴山八幡宮拝殿、釣殿及び神饌所並びに末社薬祖神社社殿



当社の社殿は東向きで、西から東へ本殿・釣殿・拝殿と直線上に並ぶ。拝殿・釣殿は本殿と同じく寛文9年（1669）の建立であるが、華麗な本殿に比べ質素な外観をしており、本殿の極彩色が鮮明であった頃は極めて対照的であったと思われる。神饌所は、釣殿の北側に位置する一間四方の建物で、神前に供える酒食などを調理もしくは収納する場所である。弘化2年（1845）に建立されたもので、棟札が現存する。史料には「神供所」あるいは「御供殿」などと記されている。社殿の正面に向かって右手の奥、石積みによって一段高くされた場所に建つのが末社の薬祖神社である。

たかだじんじや しきまい  
高田神社の獅子舞



毎年10月17日に行われる高田神社の秋祭りにおいて舞われている。高田神社は、大正2年（1913）近郊五社が合併したもので、元は久保神社にて行われていた。雌雄の獅子に青年が各12人ずつ入り、向かい合って闘争する勇壮な舞である。伴奏は、横笛8人と胴丸太鼓4人で行う。

せきとうわほうとう せきぞうほうきとういんとう  
石塔無縫塔・石造宝篋印塔



文珠堂の裏手墓地に花崗岩製石塔で無縫塔と宝篋印塔が並んで立っている。無縫塔は、銘が無いが様式上から室町時代初期あるいは南北朝のものと言われ夢窓国師の塔と伝えられている。また、宝篋印塔は、宝山大和尚の塔で南北朝時代のものと言われている。

## つやま 津山だんじり



イベントの実施とうまく両立させるべく、努力が重ねられている。

城下町津山では徳守神社の秋の祭礼行事として、新田村の氏子が神輿をかき、戸川町は猿田彦命に擬して先駆けを務め、その他は各町ごとに趣向をこらした「練物」を出して供奉するのが慶長以後の慣例であり、その練物がどのようなものであったかは不明であるが、徳守神社が城下町の総鎮守として再興されて以来の行事であったことがわかっている。現在、10月の祭礼は町の活性化や観光開発の意味をこめたイベント=「津山まつり」として、個々の神社・町内だけでなく行政や商工会議所も協力する形で実施されており、文化財指定の「だんじり」以外に新たに作られた「かざり山車」も出動するなど、伝統的な文化の保存と現代的な

## はちまんじんじゅおよ ものみじんじゅ はなまつ 八幡神社及び物見神社の花祭り



八幡神社は、11月3日、物見神社は、10月25日以前の日曜日に若い衆が花を持って歩き、御神幸に色彩を添える。この花は、各地区が造花（竹・木・色紙により製作した傘形の一種のダシ）で作り、梅・桜・しだれ柳の3種でいずれも春の花である。創始の時代は、不詳であるが、社殿（再建延宝6年（1678））の建立の頃とされている。由来は、家内安全、五穀豊穣う氏神様に祈願感謝する行事である。

## みょうこう に がぞう つけたり みょうこう に しょくそく 妙向尼画像 附 妙向尼消息



織田信長配下の武将森可成の妻であり、鬼武藏と称された武藏守長可、天正10年（1582）6月に本能寺において織田信長とともに壮絶な最期を遂げた欄丸、徳川家康の下で美作国主となった忠政などの母である妙向尼の画像である。上畳に座した妙向尼を描いたもので、頭布は緑青を用い、衣装は淡い色調で描かれるが、いたるところに胡粉の盛り上がりによる文様が施されている。表情は穏やかであるが口元には秘めた強い意志を感じられる。左手は指を伸ばして手のひらを下にして左の膝に載せ、右膝上の手のひらを上にしてのせた右手には軽く数珠が握られている。

## にいのひがし ほうきょういんとう 新野東の宝篋印塔



宝篋印塔は、津山市役所勝北支所の前、国道53号線の南側に立っている。この地は、以前から観音堂と称し、荒廃した堂跡には、おびただしい石塔類が土中に埋没していた。昭和57年3月に国道改修のために行われた発掘調査では、ここから備前焼の壺、青磁碗（南宋）などが出土している。この2基の宝篋印塔は、昭和の初め、このところから掘り出して立て直したものである。